

第一章 お見合いの場

二十歳になったばかりの私は、大学の講義を終えて帰宅するなり、親戚の伯父に呼びつけられた。

「今日の午後三時から、お前のお見合いがある。ちゃんと着替えて、礼儀正しくしろ」

伯父の声はいつも通り強圧的で、反論の余地など最初からなかった。私は物心ついた頃からこの家に引き取られ、伯父夫婦に育てられてきた。実の両親の顔はほとんど覚えていない。養育の恩を盾に取られ、進路も交友関係も、ほとんどが伯父の意向で決まってきた。大学に通わせてもらっていることすら、「お前がまともな嫁に行くための最低限の箔付けだ」と公言されている。

だから、お見合いを拒否する権利など、私にはなかった。

指定された場所は、都内の高級ホテルの最上階にある個室レストランだった。窓一面がガラス張りで、眼下に広がる街並みは、私の日常とはまるで別世界だった。黒いスーツに身を包んだ伯父が、私の肩を乱暴に押す。

「向こうはうちの取引相手の社長だ。年は四十だが、見た目は若くて堅実だ。お前みたいな何の取り柄もない女が、あんな

な男に貰ってもらえるのは奇跡だと思え」

私はただ俯いて頷くしかなかった。今日のために用意された薄いピンクのワンピースは、伯父の妻である伯母が選んだものだ。胸元が少し開いていて、膝上十センチほどのかわいいいけれど、どこか幼さを強調したデザイン。大学の友達が着たら「可愛いね」で済む服が、私にはただの商品タグのように感じられた。

個室の扉が開いた。

中にはすでに一人の男が座っていた。

四十歳。黒髪を短く整え、シャープな輪郭に薄い唇。黒いスーツは体の線にぴたりと沿い、余裕のある肩幅と、長い指が目に入る。冷たい黒い瞳が、ゆっくりと私を上から下まで舐めるように見た。視線が胸元に止まった瞬間、私は思わず息を詰めた。

「初めまして。桐生です」

低い、落ち着いた声。感情の起伏がほとんど感じられない。伯父が慌てて私を紹介する。

「こちらの娘が、うちで育てている姪でして。大学二年で、まだ二十になったばかりですが、素直で従順な子です。どう

「ぞよろしくお願いします」

私は小さく頭を下げ、「初めまして。よろしくお願いします」とだけ言った。声が裏返らないように、必死に抑えた。

伯父はすぐに「では、二人きりで話を」と席を立ち、個室を出ていった。残された空気は、急に濃くなった。

桐生は黙って私を見ていた。視線がゆっくりと、私の顔から首筋、胸の膨らみ、細い腰、脚へと移動する。品定めされる家畜のような感覚が、背筋を凍らせる。

「座って」

短く命じられ、私は指定された向かいの席に腰を下ろした。テーブルの上にはすでに紅茶が用意されていた。桐生は自分のカップに手を伸ばさず、ただ肘をつき、顎を手の甲に乗せて私を観察し続けた。

「名前は」

「……春です」

「春。いい名前だな。処女か」

いきなりの質問に、私の顔が真っ赤に熱くなった。言葉が出ない。伯父が事前に「嘘はつくな。向こうは全部知ってい

る」と念を押していたからだ。

「……はい」

「いい。純潔のまま貰えるのは助かる」

彼は淡々と言い、初めて口元をわずかに緩めた。それが笑みなのか、単なる口の形なのか判別がつかない。ただ、その冷徹な瞳の奥に、明らかに「所有」の色が浮かんでいるのは分かった。

「お前の伯父とは長年の付き合いだ。借金の肩代わりもしてやっている。だからお前は、嫁として貰う。文句はないな」それは質問ではなかった。通告だった。私は俯いたまま、小さく頷くしかなかった。指先が震え、膝の上で強く握りしめられる。

桐生はゆっくりと立ち上がり、私の隣の席に移動してきた。椅子の脚が床を擦る音が、やけに大きく聞こえる。彼の体から漂う、落ち着いた柑橘系の香りと、男特有の熱が、急に近くなった。

「顔を上げろ」

命じられ、私は恐る恐る視線を上げる。真正面から、黒い瞳が私を射抜いていた。彼の手が伸び、私の顎を軽く摘まむ。

指先が熱い。

「震え方がいい。処女特有の、拒絶と恐怖が混じった震えだ。調教しがいがある」

「調教……?」

思わず声が出た瞬間、彼の親指が私の下唇をゆっくりと押し広げた。唇の内側の柔らかい粘膜を、指の腹で撫でるように擦る。

「結婚したら、お前の体は全部俺のものになる。特にここだ」

彼のもう一方の手が、テーブルの下で私の太もものに触れた。薄いワンピースの生地越しに、熱が直接伝わる。指がゆっくりと内側へ滑り、スカートの裾を少しずつ押し上げていく。

「いや……ここは、レストランで……」

「伯父は出て行った。誰も入ってこない。俺がそう手配した」

彼の声は相変わらず低く、感情が乗っていない。だからこそ、余計に怖い。指がさらに上がり、私の下着の縁に触れた。薄いレースの生地を、指先でなぞる。

「濡れていないな。当然だ。まだ怖がっているだけだ」

彼はそう言いながら、指を少しだけ内側に滑り込ませ、私の秘部の入り口を軽く押した。処女膜の薄い感触を確かめるように、ゆっくりと円を描く。私は声を殺して身を縮こませた。

「ここは今夜、ゆっくりと壊す。まずは上からだ」

彼の手が、突然私の胸に伸びた。ワンピースの胸元に指をかけ、生地を外側にずらす。ブラジャーのカップが露わになり、さらに指が潜り込んで、直接私の乳房を握った。

「あっ……！」

思わず小さな声が漏れる。彼の掌は大きく、私のまだ発展途上の柔らかい乳房を、容赦なく包み込む。指が肉を揉むように動くと、敏感な先端がすぐに硬くなってしまった。

「乳首がもう立っている。感度がいいな」

彼は冷たく評価し、親指と人差し指で、私の右の乳首を摘まんだ。

強くはない。だが、決して優しくもない。指の腹で軽く摘まみ、そのままゆっくりと捻る。柔らかい突起が、彼の指の間

で潰されるように変形する。

「んっ……や、やめて……っ」

「やめない。お前はこれから、俺に乳首を摘まれることに慣れる。朝も夜も、食事中も、仕事から帰ってきた時も。いつでも俺が摘みたい時に摘む。理解したか」

彼はそう言いながら、摘まんだままの指に力を込めた。少し強く。乳首の根元を締め付けられ、鋭い痛みと、同時に下腹部に走る妙な熱が混じる。

「ひゃっ……！ 痛……い……」

「痛いだけの反応はまだだな。そのうち、痛くても感じるように調教してやる」

彼は左の乳首にも同じように指を伸ばし、両方を同時に摘まんだ。左右対称に、ゆっくりと引き上げるように引っ張る。

私の乳房が少し変形し、ピンク色の突起が彼の指に挟まれて潰される。

「いい色だ。処女の乳首は、まだ汚されていないから綺麗だ。これを毎日摘んで、赤く腫らしてやる。お前が『もう摘まないで』と泣きながら頼んでも、構わず摘む。それが結婚生活だ」

彼の指が、さらに強くなった。摘まんだまま、軽く上下に揺する。乳首の先端が、指の腹で擦られ、摩擦熱がじわじわと広がる。私の呼吸が乱れ、太ももが自然と閉じようとするが、彼の膝が邪魔をして閉じきれない。

「体が正直だな。乳首を摘まれて、脚を閉じなくなる。処女特有の、恥ずかしい反応だ」

彼はそう言いながら、摘まんだ指を少し緩め、今度は指の腹で乳首の先端をゆっくりと擦り始めた。円を描くように、時折軽く摘まみ直す。私の乳首は、最初の痛みから徐々に熱を持ち始め、硬く尖ったまま、彼の指に弄ばれていた。

「は、は、は、は、は……こんな場所で……」

「恥ずかしいのいい。お前の恥を、俺が全部引き剥がしてやる。結婚したら、お前は俺の前で裸で過ごす。乳首を摘まれながら食事をし、摘まれながら勉強をし、摘まれながら寝る。それが日常になる」

彼は片方の乳首を摘んだまま、もう片方の手で私の顎を再び持ち上げ、唇を重ねてきた。キスというより、ただ唇を押し付けるような、所有の確認。舌がすぐに割り込み、私の口内を強引に掻き回す。唾液の音が、静かな個室に響く。

その間も、指は乳首を離さなかった。摘み、捻り、擦り、時折強く引っ張る。私の乳房は、彼の掌の中で熱を持ち、乳首は赤く腫れ始めていた。

ようやく唇が離れた時、私は息を荒げ、目に涙を浮かべていた。

桐生は、摘まんだままの乳首を、最後にもう一度強く捻った。

「んあっ……！」

抑えきれない声が漏れる。彼は満足そうに、ようやく指を離した。摘まれていた乳首は、赤く腫れ、先端がぴんと尖ったまま、冷たい空気に晒されて小さく痙攣していた。

「いい反応だ。今夜から本格的に調教を始める。お前は今日から、俺の妻だ」

彼はそう宣言し、私の乱れた胸元をそのままに、再び自分の席に戻った。まるで何事もなかったかのように、紅茶のカップを手取る。

私は、腫れ上がった乳首の残る感触と、下着の内側にじんわりと滲んだ熱を感じながら、ただ俯くことしかできなかった。

伯父が戻ってくるまでの数分間、桐生は一度も私を見なかった。ただ、冷たい横顔で街を眺めているだけだった。

だが、その沈黙の中で、私ははっきりと理解した。

これから始まる結婚生活は、甘いものなど何一つなく、ただただ、私の体と心を、彼の都合で弄び、壊していくためのものなのだ。

そして、その第一歩が、たった今、この個室で、すでに踏み出されてしまったのだ。

第2章 所有の始まり

桐生に乳首を摘まれたまま、伯父が個室に戻ってきた時、私はまだ胸元を整えきれずにいた。薄いピンクのワンピースの生地は乱れ、ブラジャーのカップがずれて白い肌が覗いていた。伯父はそれに気づいても、何も言わなかった。むしろ、満足そうに顎を引いただけだった。

「どうでしたか、桐生社長」

「貰う。今日中に手続きを済ませる」

桐生の答えは簡潔で、冷たい。伯父は深く頭を下げ、「ありがとうございます。では、すぐに市役所の方を」と慌ただしく動き出した。私はただ、腫れ上がった乳首の残る熱と、下着の内側にじんわりと広がる湿り気を感じながら、俯いていた。

その日のうちに、婚姻届は提出された。私の意思など、最初から必要とされていなかった。伯父が用意した書類に、私は震える手でサインをした。桐生は隣で黙ってペンを走らせ、印鑑を押す。役所の職員の笑顔が、私には嘲笑のように見えた。

「これで夫婦だ。荷物は後で取りに行かせる。今から俺の家に来る」

桐生はそう言い、私の手首を掴んだ。指の力が強く、逃げられない。車は黒い高級セダンで、後部座席に押し込まれた私は、窓の外を流れる街並みをぼんやりと眺めることしかできなかった。運転席の桐生は後ろを一度も振り返らない。ただ、冷静にハンドルを握っているだけだ。

到着したのは、都心の高層マンションの最上階だった。オートロックを解錠し、広いリビングに入った瞬間、私は足を止めた。ガラス張りの窓から見える夜景は綺麗だったが、家具は無機質で、生活感がほとんどない。ここがこれから、私の「家」になるという現実が、ようやく重くのしかかってきた。

「脱げ」

桐生はジャケットを脱ぎながら、短く命じた。私は立ち尽くしたまま、彼の顔を見る。

「……服を、ですか」

「全部だ。下着も。これからお前は、俺の前では裸でいる。それがルールの一つだ」

声に感情はない。だが、その冷たさがかえって私の背筋を凍らせる。拒めばどうなるのか。伯父の顔が脳裏をよぎる。借

金の肩代わり。取引の継続。私はただの商品だった。

震える指で、ワンピースのファスナーを下ろす。生地が床に落ち、薄いブラジャーとパンツだけになった体が、冷たい空気に晒される。桐生はソファに腰を下ろし、脚を組んで私を眺めた。

「続ける」

ブラジャーのホックを外すと、まだ赤く腫れ気味の乳首が露わになる。さっき摘まれた痕が、ピンク色に残っていた。次にパンツを下ろすと、黒い陰毛に覆われた秘部が、無防備に開かれる。私は両腕で胸を隠そうとしたが、桐生の「手を下ろせ」という一言で、それもできなくなった。

「ここに来い」

命じられるまま、彼の前に立つ。桐生は座ったまま、私の腰に両手を回し、引き寄せた。顔が彼の胸元に埋まり、柑橘系の香りが鼻を突く。大きな手が、ゆっくりと私の背中を撫で下ろし、尻の割れ目に指を這わせる。

「処女の尻は締まっているな。後でここも使う」

指が割れ目を割り開き、入り口を軽く押す。私は身を強ばらせ、小さな声を漏らした。彼は構わず、指を前に回し、今度

は私の秘部に触れた。陰唇をゆっくりと割り開き、まだ処女膜で塞がれた入り口を、指の腹で円を描くように撫でる。

「濡れてきている。乳首を摘まれただけで、こんなになるのか」

「や、やめて……ください……」

「やめない。お前の体は、もう俺のものだ。好きに触る」

彼はそう言い、中指を少しだけ押し入れた。処女膜の薄い膜が、指先に抵抗する感触がはっきりと分かる。痛みが走り、私は思わず彼の肩を掴んだ。桐生は構わず、指を浅く出し入れし始める。膜を壊さない程度に、慎重に、しかし容赦なく。

「痛い……っ、お願いします、やめて……」

「痛くて当然だ。処女を貰うのは、痛がらせるためでもある。お前が泣きながら俺の指を受け入れている姿を、俺は気に入っている」

彼の親指が、クリトリスに触れた。まだ小さな突起を、指の腹でゆっくりと擦る。下腹部に、痛みとは違う熱がじわじわと広がる。私の脚が震え、膝が崩れそうになる。桐生はそれを見逃さず、私の腰を支えたまま、指の動きを速めた。

「感じているな。体が正直だ。処女なのに、こんなにすぐ反応するとは」

「ち、違います……っ、こんなの、嫌なだけです……」

「嘘をつくな。ここがこんなに熱くなっている」

彼は指を抜き、濡れ始めた秘部の愛液を、私の目の前に見せた。指先が糸を引いている。恥ずかしい。屈辱的だ。私は顔を背けようとしたが、彼のもう一方の手が後頭部を掴み、無理矢理視線を戻させた。

「自分の汁をよく見る。これから毎日、もっと出るように調教してやる」

そう言い終わると同時に、彼は私をソファに押し倒した。仰向けになった私の両脚を割り開き、彼自身がその間に割り込んでくる。まだ服を着たままの彼の股間が、私の剥き出しの秘部に押し当てられる。硬い感触が、布越しに伝わってきた。

「まずは口だ。跪け」

彼は立ち上がり、ベルトを外した。ズボンと下着が下ろされ、すでに硬く勃起したペニスが、私の目の前に跳ね出す。太い。長さもあって、青筋が浮き、先端からは透明な先走りが滲んでいる。処女の私には、恐ろしく大きい。

「啞えろ。齒を立てたら承知しない」

私は震えながら跪き、恐る恐る顔を近づける。独特の匂いが鼻を突く。舌を出し、先端を舐めると、塩気の強い味が広がった。桐生はすぐに後頭部を掴み、無理矢理奥まで押し込んできた。

「んぐっ……！　むっ、むぐっ……！」

喉の奥に亀頭が当たり、息ができなくなる。涙が自然と溢れた。彼は構わず、腰を前後に動かし始める。私の口を、ただの穴として使っている。唾液が溢れ、顎を伝って胸元まで落ちる。乳首が、その冷たい雫に触れて小さく痙攣した。

「喉の奥まで啞えろ。結婚した女の口は、夫のチンポを綺麗にするために存在する」

彼の言葉が、耳に直接叩き込まれる。私は必死に呼吸を整えようとしながら、口を大きく開き、彼の動きに合わせた。時折、深く突き込まれてえずき、胃の内容物が込み上げる。それでも彼は止めない。むしろ、私の苦しむ顔を見て、満足そうに目を細めていた。

十分近く口を使われた後、彼はペニスを引き抜いた。糸を引く唾液が、私の唇と彼の先端を繋いでいる。私は咳き込み、床に両手をついて荒い息を繰り返した。

「次はここだ」

桐生は私を再びソファに仰向けにさせ、両脚を大きく開かせた。自分のペニスを、私の秘部に押し当てる。熱い先端が、処女膜の上を滑る。

「痛がれ。泣け。それがお前の初めての価値だ」

彼はそう言い、一気に腰を突き出した。

「ひぎっ……！ あっ、あああっ……！！」

激痛が下腹部を貫いた。処女膜が破れる感触が、はっきりと分かった。熱いものが溢れ、太ももを伝う。血だ。私の初めての血が、彼のペニスを赤く染めている。桐生は構わず、奥まで埋め込み、動きを止めない。

「締まっているな。処女の穴は最高だ。これから毎日、この穴を俺の形に作り変えてやる」

彼の腰が、激しく前後に動き始めた。痛みで視界が白く霞む中、私は声を上げて泣いた。乳首が、彼の胸に擦れて痛い。

彼はそれを見逃さず、片方の手で私の乳房を掴み、乳首を再び摘まんだ。

「痛くても感じる。お前の体は、痛くても感じるようにできている」

摘まれた乳首が、痛みと快感の境界を曖昧にしていく。下腹部の痛みも、徐々に熱に変わり始めている。私はそれを認め
たくなかった。だが、体は正直に反応し、愛液と血が混じった音を立てて、彼のペニスを受け入れてしまっていた。

桐生は最後まで、冷たい表情を崩さなかった。ただ、私の中で脈打つ感覚だけが、彼の興奮を物語っていた。射精の瞬
間、彼は私の奥深くに精液を放り込み、そのまま体重を預けてきた。

「これで、お前は完全に俺のものだ」

低く告げられた言葉が、耳に残る。私は彼の下で、ただ涙を流しながら、壊れ始めた自分の体を感じていた。

結婚生活の、本当の地獄は、ここから始まるのだと。

第3章 秘部の剃毛

翌朝、私が目を覚ました時、体は鉛のように重かった。下腹部の奥がずきずきと痛み、太ももの内側は乾いた精液と血の混じったものでべっとりと張り付いている。昨夜、桐生に処女を奪われた感触が、まだ生々しく残っていた。

寢室のカーテンは完全に閉め切られ、薄暗い。隣のベッドはすでに空いていた。私はゆっくりと上体を起こし、自分の体を見下ろす。胸の乳首は昨夜摘まれ続けたせいで赤く腫れ、秘部は熱を持ってひくひくと痙攣していた。初めての性交の痕跡が、あまりにもはっきりと残っている。

ドアが開いた。桐生がバスローブ一枚の姿で入ってくる。髪は整えられ、表情は昨夜と変わらず冷徹だった。手には小さなポーチと、折りたたみ式の小さなテーブルを持っている。

「起きろ。今日から生活のルールを教える」

低い声に、私は布団を胸に引き寄せた。彼は構わず近づき、布団を乱暴に引き剥がす。私の全裸の体が、またもや無防備に晒された。

「隠すな。俺の前では常にこの状態だ。理解したか」

「……はい」

小さく答えると、彼は頷き、ポーチを開けた。中から出てきたのは、電気シェーバーと、剃刀、シェービングジェル、小さな鏡、そして消毒用のアルコール綿だった。私の心臓が、嫌な予感で大きく鳴る。

「脚を開け。今日はお前の秘部を綺麗にする」

「え……？」

「陰毛だ。全部剃る。俺の妻のあそこは、毛のない無垢な状態でなければならない。処女を貰った穴を、さらに見やすくするためだ」

彼の言葉に、私は思わず脚を閉じた。恥ずかしい。大学の友達と銭湯に行く時ですら、ここまで無防備に人に見られたことなどない。それを、こんな形で――。

「拒否する権利はない。開け」

桐生は私の足首を掴み、無理矢理脚を大きく開かせた。股関節が限界まで開き、秘部が完全に露わになる。昨夜破られた処女膜の傷口はまだ赤く、周辺の陰毛に乾いた精液と血が絡みついている。彼はそれを見て、淡々と呟いた。

「汚いな。まずはこれを洗い流す」

彼は浴室に私を連れて行き、シャワーを浴びせた。熱い湯が体を流れる中、彼の指が直接私の秘部に触れ、残った汚れを丁寧に、しかし容赦なく洗い流していく。陰唇の間に指を入れ、傷口を刺激するように擦る。痛みで体が跳ねると、彼は冷たく言い放った。

「動くな。お前の穴を綺麗にしているだけだ」

洗い終わると、彼は私を再び寝室に連れて戻り、折りたたみテーブルの上に仰向けに寝かせた。両脚を大きく開かせ、膝を立てた姿勢で固定するように、自分の体で私の脚を押さえる。目の前には小さな鏡が置かれ、私自身の秘部がくっきりと映し出されていた。

「自分のあそこをよく見ろ。これから毛がなくなるところを、ちゃんと確認しろ」

シェービングジェルが、冷たい感触で秘部全体に塗り広げられる。彼の指が陰毛の根元まで丁寧に伸ばし、ジェルを馴染ませていく。クリトリスの周辺も、陰唇の皺の間も、すべてが彼の指に弄ばれる。私は恥ずかしさで顔を真っ赤にし、目を閉じようとしたが、

「目を開け。見ていないと、傷をつけるぞ」

と脅され、仕方なく鏡を見つめた。自分の秘部が、ジェルでテカリ、彼の大きな指に揉み解されている光景は、屈辱以外の何物でもなかった。

次に、電気シェーバーが低いうなりを上げて近づいてくる。最初に外陰部の濃い毛から刈られていく。振動が直接肌に伝わり、私の体が小さく震えた。刈られた毛が、テーブルの上にぼろぼろと落ちる。徐々に、秘部の輪郭が露わになっていく。

「いい眺めだな。毛がなくなると、処女を貰ったばかりの穴がよく見える」

彼は淡々と作業を続け、今度は手動の剃刀に持ち替えた。刃が肌に触れ、ゆっくりと根元から毛を剃っていく。陰唇の際、クリトリスのフード周辺、尻の割れ目近くまで、一切の妥協なく剃られていく。時折、剃刀が敏感な部分に当たると、私は小さく声を漏らした。

「ひゃっ……！」

「動くなと言ったはずだ。ここを傷つけて出血させたら、お前が困るだけだぞ」

彼の声は冷たいまま、剃刀を慎重に、しかし確実に動かしていく。私の秘部は、徐々に子供のように無毛の状態に近づいていく。剃り終わると、彼はアルコール綿で丁寧に拭き上げた。冷たい刺激が傷口に染み、私は思わず腰を浮かした。

「完成だ。よく見ろ」

鏡に映る自分の秘部は、もう陰毛の一本も残っていなかった。ピンク色の陰唇が完全に露出し、昨夜破られた入り口が、赤く腫れ気味にひくひくと動いている。クリトリスも、フードが *covered* されたように小さく尖って見えた。あまりにも無防備で、恥ずかしい姿だった。

「綺麗になったな。これでお前の穴は、いつでも俺が見て、触って、使える状態だ」

桐生はそう言い、剃りたての秘部に指を這わせた。つるりとした感触を確認するように、陰唇を割り開き、傷口の周辺をゆっくりと撫でる。毛がなくなった分、指の感触がダイレクトに伝わってくる。私は羞恥で体をよじったが、彼は構わず指を奥へと押し入れた。

「んっ……！ や、やめて……まだ痛い……」

「痛くても使う。毛がなくなった穴は、感度が上がるらしい。お前の場合、どうなるか試してやる」

中指が、まだ痛い内部をかき回すように動く。親指がクリトリスを直接擦り始めた。剃りたての肌は敏感で、普通なら感じないはずの軽い刺激が、鋭く下腹部に響く。私の呼吸が乱れ、知らず知らずのうちに腰が彼の指に合わせて動いてしまっていた。

「ほら、もうこんなに濡れている。毛を剃っただけで、雌の穴が欲しがっている」

彼は指を抜き、愛液で濡れた指を私の唇に押しつけた。嫌々ながらも口を開けると、自分の味が舌に広がる。屈辱的だった。

「これから毎日、俺が確認する。毛が少しでも生えてきたら、また剃る。お前は自分で剃ることを許されない。俺が直接やる。理解したか」

「……はい」

答えると同時に、彼は自分のバスローブを開き、すでに硬く勃起したペニスを取り出した。剃りたての秘部に、熱い先端を押し当てる。

「毛のない穴に、朝から中出ししてやる。お前の新しい日常の始まりだ」

彼は一気に腰を突き出し、まだ痛い内部をいっぱいに広げた。つるりとした感触が、普段以上に密着して伝わってくる。

私は声を上げて身をよじったが、彼は冷たい表情のまま、激しく腰を打ち付け始めた。

「あつ、あつ、だめ……っ、擦れすぎて……変になる……！」

「変になれ。毛のないお前の穴は、これから毎日、俺のチンポでかき回される。それが調教だ」

彼の指が再び乳首を摘まみ、強く捻る。下半身は激しく突かれ、上半身は乳首を弄ばれる。剃りたての秘部が、ぬちゃぬちゃと卑猥な音を立てて彼を受け入れていた。私は涙を流しながら、自分が少しずつ壊されていくのを感じていた。

射精の瞬間、彼は奥深くに精液を放り込み、そのまま動きを止めた。熱いものが内部に広がる感触が、毛のない秘部を通して、より鮮明に伝わってくる。

「いい眺めだ。精液が溢れてくるのも、毛がないとよく見える」

彼はそう言い、私の股間を鏡に映したまま、満足そうに眺めた。私はただ、羞恥と快感の混じった余韻の中で、天井を見つめることしかできなかった。

秘部を剃られたという事実が、これから始まる調教生活の、さらなる地獄の入り口なのだと、私ははっきりと理解した